
バンド

金地院 憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バンド

【Nコード】
N3842P

【作者名】
金地院 憂

【あらすじ】
スリーピースバンドの悲劇的な末路。

我に返った僕は、ラベルの破れかけたLPレコードに針を乗せた。

何百回と聞いたベース音が、四畳半を満たしていく。

それにギターとドラムが重なる。

どんなに練習しても上手く弾けなかったメロディーが、僕の耳に流れてくる。

結局裏切られた。

どうしてこんな事になったんだろう。

一度も洗濯をしたことの無いカーペットに、二人の赤い血が広がっている。

僕は包丁をテーブルに放り投げ、レコードのボリュームを上げた。

僕たちがバンドを組んだのは、大学2年の春だった。

浩二と香織と出会ったのは、商学のゼミだった。

教授の講義中に音楽談議に花が咲いた僕たちは、次の日から一緒に

やり始めた。

この2人とやる音楽が、僕には最高に気持ち良かった。

元氣印である浩二のドラムは見た目とは裏腹に繊細で、ギターを弾きながらボーカルまで担う香織のセンスには、紅一点という言葉は相応しくなかった。

初めてステージで演奏した学祭。

浩二の兄貴の経営するライブハウスでの飛び入り参加。

今になって考えると無茶苦茶だったバンド活動も、この3人だったから出来たのかもしれない。

落とした単位と比例するかのようには、集客数もどんどん増えていった。

この先もずっと、3人で続いていくと思っていた。

しかし今日、二人が僕のアパートを訪れた。

バンドを辞めたいと言ってきた。

理由は簡単だった。

二人が恋に落ちたのだ。

二人にとって僕のいる3人のバンドは、もはや居心地の良い場所ではなかったのだ。

僕は嫌だった。

二人が付き合い始めた事じゃない。

3人のバンドが、僕たちの思い出が失われるのが怖かった。

僕はキッチンにあった包丁を握り締め、二人に歩み寄った。

天井の梁にロープを括り、準備が整った。

ふと、床で冷たくなっている二人に声をかけた。

「向こうに着いたら、いつも通りリハーサル始めような。」

そして踏み台を蹴倒し、首に食い込むロープに体重を預けた。

薄れていく意識の中、初ライブの時の写真が目に入った。

3人の笑顔が、僕を送り出している。

もうレコードの音は聞こえない。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3842p/>

バンド

2010年12月10日17時55分発行